



アムラは女盗賊、シーフである。

主にオアシスの町レイクブルーを拠点にして、広いエルス大陸を駆け回って活動している。基本的には富める者を相手に盗みを働いているが、時には危険なダンジョンへと潜り込むこともある。

エルス大陸における危険とは、命の危険よりも、むしろ性に関わることのほうが大きい。

実際、先日、レイクブルー郊外のダンジョンへ潜入した時は、敵の女モンスターに捕まり、果てなき陵辱を受けることとなった。

穴という穴に男達の肉棒を突き刺され、何度も精液を吐き出され、喉の奥も膣の中もベトベトに汚されまくった。泣いて許しを乞うたが、男達は欲望のままにアムラを犯し続けた。休みなく、半日もぶっ通しで陵辱される中で、アムラは次第に快楽の虜となっていた。

やめて、と言いながらも、その声には甘い響きが混じっていた。

最初は吐き気を催した白濁液の臭いも、いつしか香り高さを感じるようになり、もっと欲しい、もっとザーメン欲しい、と望むようになった。

もはや肉奴隸として一生を終えるか、という瀬戸際まで来たところで、旅の女戦士ライディに助けられ、なんとか解放された。

全身、ドロドロの精液まみれのアムラを見て、ライディはぐくりと喉を鳴らしていた。もし彼女が、悪辣な人間だったら、その場でアムラとエッチを始めていたことだろう。

いや、アムラとしては、むしろ抱いてほしかった。美しき女戦士ライディに無茶苦茶にしてもらいたかった。それくらい、もう、頭の中は淫らなことではいっぱいだった。

そんな経験をして、一ヶ月が経ち――

毎日激しいオナニーをするくらいには、すっかり身も心も変容してしまったアムラだが、なんとか、行きずりの旅人とセックスすることだけは我慢できていた。

ダンジョンでレイプされた時は、不幸中の幸いで、妊娠せずに済んだけれど、もしも不特定多数の男達に次々と中出しされたら、今度こそ孕まずにはいられなかっただろう。

だけど、そろそろ、耐えるのも限界だった。

男でも女でも、誰でもいい。自分のことをとことん犯してほしい。そんな欲求が燃え上がりつつあった。

（このままだとまずいなあ）

朝から晩までオナニーに明け暮れる日々で、まともにシーフとしての仕事が出来ていない。

そろそろ金銭的にも、動き出さなければいけない。

「よし、久しぶりに仕事を頑張るぞ！」

そんな風に気持ちを入れたアムラは、ターゲットを物色し始めた。そして、見つけた。

砂漠地帯を抜けたところにある中規模の町ローグ。

そこに住む富豪ボルトフの館に、金銀財宝が無防備に保管されている、このことである。

これは盗みに入るしかない！　と思ったアムラは、さっそく仕事にかかった。

しかし――

※※※

体を椅子に縛りつけられて、身動きがとれない。

後ろ手に手首を拘束具で固められ、両脚は椅子の肘掛けに引っかけられる形でM字に開脚させられロープで縛られている。

かなり恥ずかしい格好だ。

(しくったなあ……)

アムラは部屋の中を見回して、ため息をついた。

それなりにシーフとしての経験を積んできたつもりだった。ヘマをやらかしたことも数多くあるけど、今回はそれほど難しい仕事ではないと踏んでいた。

まさか、普通の富豪の館に忍び込んでの盗みに、こうもあっさり失敗してしまうとは、夢にも思っていなかった。

撃退され、気を失って、目を覚ませばこんな風に椅子に縛られていた。

部屋の中には誰もいない。

(これから、私、どうなるんだろ)

大股開きになって。パンツの上からでも、股間の割れ目がクッキリと浮か
び上がって見えるような体勢だ。

こんな風に扱われていて、何をされるのかなんて、答えはもうわかりきつ
ている。この館に侵入する前に聞いていた噂の通りなら、まず間違いない、
自分は館の主人の餌食になる。

餌食とは、すなわち……。

ドアが開いた。メイド服の少女が部屋の中に入ってくる。

「あんたか」

アムラは、メイド服の少女を睨みつけた。

彼女だ。この館に潜り込んだアムラと戦い、メイドに似つかわしくない、
その圧倒的な戦闘力であつという間に叩きのめしてきたのは。

「どうも初めまして。この館でメイドをしているリズです。あなたは？」

「なんで名乗らないといけないの」

「なぜって、名前が必要だからですけど」

リズは、眼鏡の奥の目を、不思議そうにパチパチと瞬かせた。この人は何
を言っているのだろう、と言わんばかりの眼差しだ。

絶対に言うてはダメだ、とアムラは思った。どんな魔法を使われるかわからない。それこそ名前を利用して呪いをかけられたりしたら、大変な窮地に陥ってしまうかもしれない。

だから、アムラは頑として名乗るものか、と決意を固めていたが、そんな彼女の陰しい表情を見て、リズはクスツと微笑んだ。

「可愛いですね」

「は？」

「私、あなたみたいな女の子、大好きですよ」

このメイドは何を言っているのか、とアムラは怪訝そうな表情で、まじまじと相手のことを見つめる。

リズは、年齢的にはアムラと同じくらい。眼鏡をかけており、髪型は短め。常に姿勢が良くて、動きもテキパキしている。戦った時は、見事な体術でアムラのことを打ちのめした。見た目に似合わず、格闘戦を得意としている。

どこか実直で、真面目で、礼儀正しそうな少女。そして文武両道。それが、アムラがリズに抱いた第一印象であった。

けれども、リズは、イメージ通りの少女ではなかった。

「うふふ、本当に、いい眺め。お股がクッキリ見えてますね」

頬をほんのりと朱に染めたリズは、ペロリと唇を舐めた。その目線は、じつとアムラの股間へと注がれている。

パンツ越しとはいえ、アソコを見られてる……と思ったアムラは、自然と、鼠径部がじんわり熱くなるのを感じた。

（や、やばい……こんな時に……エッチな気分になってきちゃった……）

一ヶ月前に壮絶な陵辱を経験して、その時の興奮がまだ身体に残っているアムラは、自分がこれから何をされるのかと想像すると、内奥から疼きを感じ始めた。

見目麗しいリズに、股を凝視され、次第に息が荒くなってきたアムラは、とうとう自分の中から何か熱いものが溢れ出してくるのを実感した。

ジュン……と秘裂が濡れ始める。

（いやああ、だめえ）

唇を噛みしめ、自分の身体を何とかコントロールしようとするアムラだが、内なる性欲はどうしても抑えきれない。

白いパンツに、染みが浮かび上がってきた。

「ふふふ、欲しくなってきましたか？　この様子だと、媚薬も、特殊な魔法も、必要なさそうですね」

そこへ、ドアを開けて、でっぷりと太った男が入ってきた。

脂肪たっぷりで、歩く度にふうふうと暑苦しい息を吐いている、その男は、身なりだけは立派である。一目で、アムラは、相手がこの館の主ボルトフであると察した。

「これは、これは。上物が手に入ったな。よくやった、リズ」

「お褒めにあずかり光栄です、ボルトフ様」

「いつも通り、お前に任せる。好きなように弄り回せ」

ボルトフはそう言って、椅子に腰掛けると、優雅にワインを飲み始めた。

（こいつ、観賞しようとしてる……！）

アムラは、自分が見せ物にされていると感じた。

これから何をされるのか、もう、考えるまでもない。

リズが微笑みながら近寄ってきた。透き通った白い頬が、アムラの目の前まで迫ってくる。

間髪入れず、リズは、柔らかな唇を、アムラの唇へと重ねてきた。

「んん……！ むう……！ や、やめ……ぢゅ……ん……」

いきなりリズに舌を差し込まれ、濃厚なキスを交わされてしまう。椅子に縛られているアムラは、どうすることも出来ず、リズの唇を受け入れるしかない。

「名前を、教えて……ねえ、そのほうが興奮するから……ぢゅぢゅぢゅ、れろれろ、じゅぱ、じゅぷ、ちゅうううう」

「いやああ……絶対に、教えない……んぐう、ぢゆる、ぴちや、んつぶ、くふう、ん、んん、むぐうう……ぢゅ、ぢゅ、ぢゅうう……」

「教えてくれたら、もつと激しくいやらしいこと、してあげますよ……」

そう言いながら、ペロチューを続けつつ、リズはアムラの股間へと手を伸ばした。

パンツの上から、割れ目をさすり始める。すでに布地はしつとりと濡れており、リズの指がなぞる度に、ヌチヌチといやらしい音が聞こえてくる。

「はううん……あんうむ……ぢゅう……ぢゅ……ぢゆるる……」

「エッチな声が、溢れてきてますよ……ちゅ……ちゅう……気持ちよくなってるんですよね？ もつと、気持ちよくなりませんか……？」

とうとう、リズは、アムラのパンツをずらして、直接秘部を弄り始めた。クチュ、クチュ、と水音が室内に鳴り響き始める。

「くくく、いいぞ、もっと絡み合え、愛し合え」

満悦面で、ボルトフはグラスの中のワインをくゆらす。卑猥な目つきで、アムラとリズが女同士で淫らなことをしているのを、楽しそうに眺めている。あんなデブの目の保養になるなんて……と屈辱感を抱きつつも、アムラは、どこかでその屈辱もまた心地よく感じたりしていた。

「んふふ……んちゅ、ちゅ、ぢゅぢゅ……ぢゅば、れろお、れろ、ぢゅ、ぢゅ、ぢゅぢゅぢゅぢゅ、じゅっふ……」

「ああ……んあ……はあ……んぷ……ぐ……ちゅ……れろれろ……ぢゅう……ふぐうう……んぷう……ぢゅ、ぢゅ……」

だんだんと、アムラの目はとろんとしてきた。長いこと、オナニーだけで自分の獣のような性欲を抑え込んできたせいで、久々に他人にディープキスされ、アソコを弄られて、もはや我慢の限界を迎えつつある。

欲しい。もっと欲しい。出来ればチンポが欲しい。極太で、硬くて、臭いオチンポを、自分のオマンコに突っ込んでほしい。



「だいぶ場が温まってきたようだな。よし、では、そろそろ……」

ボルトフは興奮気味に鼻息を荒くすると、アムラを椅子に拘束しているロ―プをほどこいた。リズもまた手伝う。

一旦は解放されたアムラだったが、足腰に力が入らない。散々、リズにアソコを弄られて、身体はすっかり芯からとろけてしまっている。

ぐったりとうなだれるアムラの服を、リズは剥ぎ取り始めた。力任せではなく、ゆっくりと丁寧な手つきであるが、アムラには抵抗するだけの氣力がない。なすがまま、である。

服を脱がされて、パンツとソックスだけの格好となったところで、ボルトフはアムラの首に、首輪と紐を装着させた。まるで飼い犬のような扱いだ。そして、紐をグイッと引っ張ると、自分の腰前でひざまずかせる。

そして、ズボンを脱ぐと、アムラの眼前に、太くて黒光りする肉棒を突きつけてきた。

しばらく洗っていないようだ。強烈な臭いが漂っている。だけど、その臭さもまた、アムラにとっては甘美な匂いとして感じられる。

ボルトフは、冷たい眼差しで、アムラを見下ろした。

「しゃぶれ」

容赦ないボルトフの言葉に対して、アムラは思わずゴクンと生唾を飲み込んだ。

これまで、何度か盗みに失敗して、犯されることを経験している。

その度に、男のチンポをしゃぶらされてきた。嫌というほど、汚いソレを咥えさせられ、口内を汚され、しかし、アムラは実はフェラチオやイラマチオをさせられるのが、けっこう好きだった。

本来なら食のために使う口を、食べ物でもなんでもない、汚らしい局部を咥えるために使わされる。そのことが、興奮を引き起こす。

だから、ボルトフのチンポもまた、アムラの性欲を敏感に刺激し、口の中によだれを溢れさせる。

「ふぁぐ……ん……む……じゅほ！　　じゅほ！　　じゅりゆるるる！　ぐっほ！　ぐぷう！　　じゅっぶるるる！　ぐっぷ！　　ぐぷ！」

アムラは目の端にうつすらと涙を滲ませながら、苦しそうに、しかし美味しそうに、愛しそうに、一所懸命ボルトフのペニスを頬張り、しゃぶる。

「お、おお……上手いぞ。なかなかよい舌使いをするではないか」